

音読の魔法にかかると (ウルフのやり方で)

横浜 BankART Studio NYK

大崎清夏

六月の日曜日、ある会に誘われた。朗読会ではなく、発表会でも講演会でもない。信頼している友達に誘いだだったので、行ってみることにした。

その会には「同じ話を異なる本で読む(ウルフのやり方で)」という名前がついていた。主宰者であるアーティストの藤村豪さんの説明を読むと、それはひとつの「実践」ということだった。芸術における実践という言葉にはすこし特有の意味がありそうだけれど、私は素直に、つまり何かをやってみる会なのだなと思った。その会場に行ってみると、半円形に並べられた七つの椅子に、ちょうど少しずつ参加者が集まっているところだった。

ところで私は、なんだかよくわからない会に参加するのが、けっこう好きなタイプだ。法で何人もの登場人物の意識をひとすじのテキストに編みこんでいくのと同時に、七人の翻訳者の意識がそこにふわりと被さってくる。クラリッサがピーターに教わった言葉は本によって「感傷的」だったり「センチメンタル」だったり「おセンチ」だったりするし、私が開いた旧字満載の版で「性の」とか「くっついて」と書かれているところを、別の誰かが比較的最近の訳で「セックス」と端的に読んで私を驚かせたりする。七人の読者はそういう翻訳者たちの選んだ言葉⇨翻訳⇨解釈の差違に翻弄されながら、読み進んでいく。でも、それだけではない。

私はまず、ほかの六人には知りようのない私の意識を、はつきり自覚することになる。たとえば漢字の「壓倒」の読みを間違えたことに後から気づいたり、誰かが一行読み飛ばしたなと思ったり、ある箇所での訳出はどの翻訳者も苦戦したのだろうか、という感想を持ったりした私を、ほかの六人が知ることはない。逆に言えば、この実践において他の読み手がどんな体験をしたのか、私は十全に知ることはできない。もちろんそれは、私は私でしかあることができないという、ごく当然の事実なのだけれど。

ところが同時に、すくなくとも私という読み手は、七人で同じひとつの風景を見ながら、同時にほかの六人の頭のなかを覗きこんでいるような気持ちにもなってくる。それは



(ただし、信頼のおける友達が誘ってくれる、という前提がとても大事なただけだ)。考えてみれば、どんな会でも、行ってみたいと何が起るかなんだかよくわからない、ということでは共通している。それが有名な詩人のよく知られた詩の朗読会だとしても、大きな舞踊団の昔の作品の再演だとしても、同じことだ。なぜなら「なんだかよくわからない」のは、舞台上で繰り広げられることそのものではなくて、それを受けとった自分にどんなことが起るか、だからだ。

少し話が逸れるけれど、DJの友達がいつか「自分でパーティーを楽しもうっていう気がない奴はダメだ」という意味のことを言っていて、それはもう何年も前の会話なのに、よく覚えている。チャージの高いパーティーほど、パーティーに楽しませてもらおう気である。まるで、バッキンガム宮殿付近の群衆のなかにいたブレッチリー夫人やボウリー氏や、公園のベンチに腰掛けていたルクレッティアやセプティマスが「空中に文字を書き綴る飛行機雲」という同じ現象を見あげながら「クリモ」「あれはEですよ」「タフィーですよ」とてんでばらばらるることを眩しめる。別々の場所にいる彼らが互いの発言を知ることはない——を、読むと同時に自ら書いているような感じだ。七人の読み手全員で、いままさに小説を書いているような——。

それはとてもふしぎな、いまままで呼び起こされたことのない感覚、なにか自分の外側に立体的な読書空間が立ちあがって、そこに七人(中央でゆつくりカメラを回して撮影をする藤村さんを含めれば八人)皆で入ってゆくような感覚だった。そしてその感覚には、ふだん読書しているときには離れることのできない読者という席を立て、ふらふらと作者と登場人物の間にさまよい出るような、幽霊的な心地よさがあるのだった。

この心地よさは、たとえば映画館で映画を見ていて、同じシーンで見知らぬ観客どうし声をあげて笑ってしまうときのような心地よさは、違う種類のものだ。たぶん、この実践の魔法は、音読という方法にある。音読するとき、読者は読者であるまま発話者になる。物語の語り手としてクラリッサになり、ルーシーになり、ピーターになる。そしてそ

る人は多い。だから逆に、ちょっとしたことでも元が取れなかったと腹を立てて、結局その晩を、自分で台無しにしてしまう。それは、すごくありそうなことだ。対価を支払うことには「なんだかよくわからない」ことへの不安に対する保険のような面があるからだ。

そう考えると「実践」という言葉は、とてもいい。それは堂々と「何が起るかわかりませんよ」と宣言しているようなもので、お金を払って何かに自分を楽しませてもらうことが常識になっている大人には、響かないかもしれない。「実践」には、とにかく何でも起ったことを受け入れてみよう、という呼びかけがこもっていて、だから、それをOKだと思える人たちが、集まってくる。究極的にいえば、それを経ることで自分というものが何か決定的に変わってしまう可能性も「実践」にはある。

「同じ話を異なる本で読む(ウルフのやり方で)」の実践の方法は、七通りの邦訳が存在するヴァージニア・ウルフの小説『ダロウェイ夫人』を一冊ずつ七人で開き、一センチンスずつ交代で音読していくというものだった。円形に並んだ七つの椅子の中央にはムービーカメラが固定され、読み手をひとりずつ撮っていく。

ウルフの小説そのものが巧みな自由間接話では、この実践のテキストとして選ばれた『ダロウェイ夫人』の文体——登場人物のひとりひとり語り手となり、語る権利をつぎつぎに渡しあう——に、ぴったり一致する。「読んでいる私」を完全に忘れていられるとき、私は読書の大きなよろこびを受取る。それは多くの場合、黙読の静けさとともに訪れる。でもこの実践では、複数の声——幸運なこと、いい声の持ち主が揃っていた——が、「読んでいる私」「読んでいる他の誰か」「登場人物」「作者」という複数の主体を同時に味わうという、めったにない贅沢な読書体験をもたらしてくれたのだった。

日が暮れたころ、インドから戻ったピーターとクラリッサがちょうど劇的な再会を果たし、そして別れたところで、私たちは一日がかりの実践を終えた。互いにはほとんど初対面だった私たちが、一緒に読書していたというだけで高揚と疲れとを共有し、打ち解けたことも、またひとつのふしぎのようだった。今回の実践の記録は今後、映像作品としてまとめられるというのだ。その完成を楽しみに待ちながら、私はいま、ひとりで『ダロウェイ夫人』の続きを読んでいる。

*藤村豪 (Wolf Tableとして)「同じ話を異なる本で読む(ウルフのやり方で)」6月21日 BankART Studio NYK 21P

(今回は10月号に掲載)

9月号予告

◎特集 谷川俊太郎『詩に就いて』を読む

対話 谷川俊太郎十水田宗子十田原

鼎談 谷川俊太郎十水田宗子十田原

論考・エッセイ 北川透、高橋睦郎、三浦雅士、瀬尾育生、

平田俊子、野村喜和夫、谷内修三、山田兼士、

山田亮太、最果夕ヒ、暁方ミセイほか

◎小特集 日中韓三か国語連詩

連詩+エッセイ 四元康祐+明迪+金恵順+谷川俊太郎

「海の巻／米の巻／太陽の巻」

* 鮎川信夫賞インタビュー 岸田将幸+小林増嶋ほか

新人作品募集

*本誌では、既成の枠にとらわれない、真に新鮮な詩人・批評家の登場を期待しています。詩作品はもとより、評論などの投稿も歓迎します。

*枚数、篇数の制限は特に設けませんが、未発表の自作に限りません。また、他

*誌との二重投稿は選考対象になりません。

*縦書きの原稿用紙(四百字詰)を使用してください。ワープロの場合、二十

字詰で縦書きに組んでください。

*原稿の冒頭に題名・氏名を、原稿の末尾に住所・氏名(本名)・年齢・職業・

電話番号などを一稿ごとにそれぞれ明記して、原稿用紙右肩をホチキス綴じ

にしてください。

*Eメール、FAXでの送稿不可。料金不足は受け取りません。また、投稿原

稿の返却にも応じられません。

*封筒のおもてには(投稿)と朱筆してください。持ち込み原稿はすべて投稿

原稿として扱います。

*原稿締切は毎月二十日必着とし、翌月二十八日発行の翌々月号に入選作と選

評を発表します。

*原稿の送り先

〒112-0004 東京都文京区関口一-八-六-二〇三

思潮社分室内「現代詩手帖」編集部(新人作品)係

Note

↑3・10、6・23、8・6、8・9、8・15——これは70年前に刻まれた日付、6・15、10・8、2・28、1・17、3・11——その後の70年間で刻みつけられてきた日付の一部。この日付の前には当然同じような痛みがあるはずで、そこには本当は限定できない。ただ、日付が出来事の換喩になったとき、日常に穴が穿たれる。経験していない者が、その穴から死者の記憶を覗きこみ、自らの記憶をそこに上書きする。それが喩の力だ。詩がなぜ喩を必要とするのかもそれでわかる。死者と繋がる穴を穿つためだろう。私の身体の記憶にも8・15がある。(R)↑第二次世界大戦の経験者が少なくなる中で、中国、朝鮮ほか東アジアからの引揚げ経験を持つ詩人の方々に「寄稿いただいた。これまでも引揚げに関する記録はアーカイブとして蓄積されているはずだが、その経験が詩の言葉にもたらした影響についてはあまり検証されてこなかったのではないだろうか。奇しくも、7月15、16日は、今後、安保関連法案の強行採決が行われた日として歴史に記録される。一見、戦争を知らない者たちによる判断のようでありながら、いや、戦争は風化していない、かの戦争は、それを知らぬ者たちをいまなお捉えるトラウマとして、このような形で目の前にあらわれるのだと痛切に思い知らされる。(F)

現代詩手帖 8月号

第五十八巻・第八号

二〇一五年八月一日発行

編集人 亀岡大助

発行人 小田康之

発行所 株式会社 思潮社

東京都新宿区市谷砂土原町三十一

郵便番号 一六二一〇八四二

振替 〇〇一八〇一四一八二二一

電話 「編集」〇三三三二六七八一「営業」〇三三三二六七八一

FAX 「編集」〇三三三二六七八一「営業」〇三三三二六七八一

印刷所 文芸堂印刷株式会社

増頁特別定価 一四八〇円 本体一三七〇円